

会津における歴史文化研究拠点の伝承と記録

小池淳一

『新編会津風土記』の分析

Tradition and Records of Historical and Cultural Research Centers in Aizu : Analysis of the "Shinhen Aizu Fudoki (新編会津風土記)"

KOIKE Junichi

はじめに

- ① 近世地誌をめぐる視点と『新編会津風土記』
- ② 「風土記」における伝説／歴史認識―自然と人物と
- ③ 空海の伝承と真言宗寺院の消長
おわりに

論要旨

本稿は『新編会津風土記』を素材に、十九世紀初めの会津地方における歴史および文化が継承される姿とその内容について考察するものである。

ここでは古代以来の地域において蓄積されてきた宗教的な歴史意識が、社寺や堂舎、古蹟、とりわけ寺院をよりどころとして受け継がれ、また記録される際に編集、再認識されていることが明らかになった。会津という地域における歴史文化はこうした宗教的な拠点にむすびつくかたちで記憶され、認識が更新されてきたのである。

具体的には、伝説を日光山縁起の受谷や地域の展開、回国の宗教者の定着とその痕

跡として捉え直すことで、会津という一定の地域における広義の宗教史を構築する可能性が確認できた。また空海の伝承や真言宗寺院の中興の記録を広く確認し、検討することで、地域の支配権力との関わりや宗教活動の内実にも迫ることができた。以上の検討と分析により、近世の官撰地誌における歴史文化研究拠点の記事を糸口に地域宗教史を構築していく可能性と有効性を確認することができた。

【キーワード】伝説、歴史意識、空海、真言宗、陰陽道